

【建設通信新聞 令和7年1月17日】



講演する坂氏

# 愛されることで恒久的施設に

群馬県建設業協会（青柳剛会長）は15日、前橋市の群馬建設会館で建築家の坂茂氏を招き特別講演会を開いた。県内外から約300人が集まり、坂氏が世界中で手掛けた建物の解説や紙管を使った被災地での支援活動の事例に聞き入った。

青柳会長は冒頭、「建設といつた大きなくくりの中でも土木や建築、建築でも計画と施工、そして設備・電気など細かくジャンル分けをすることができる。建築の表現を通してモノづくりに向かう姿勢を感じ、それその立場から原点を確認し合える場になればと期待している」とあいさつした。

「作品づくりと社会貢献の両立を目指して」と題して講演した坂氏は、国内外の作品を紹介。代表作の一つであるパリの『ボンビドゥー・センター・メス』の設計時には、美術館のテラス

に仮設事務所を設けた経験を披露した上で、「街の中心から離れた建設地だったが、街とつながる建物にしたいと考えた」と述べた。

2024年にユネスコの世界選ばれた『下瀬美術館』（広島県大竹市）でも「市中心部から遠いため、リピーターをつくりたいと考え、台船の上にギャラリーを乗せ展覧会に合わせて配置が変わるようにした」と説明した。

## 文化的背景を聞き取る

建築家があまり社会の役に立っていないと気づいた」ことを契機に始めたという。紙管を使い、勤めて2年目の女性からの「1995年の阪神・淡路大震災では、被災者のための仮設住宅や教会を設計した。「神戸の教会は結婚式や音楽会の会場としても10年間活用され、街の復興のシンボルとなつた」と話す。この建物は台湾で大地震が起きた際に寄付され、恒久的な施設として活用されている。これらの経験から、「何が仮設で何がパーマネント（恒久的）かと考えた。例えば商業建築は30年もたずに解体されてしまう。紙でつくった建物であつても、皆さんに愛されたら恒久的な施設になり得る」と建物の本来的な在り方を提起した。

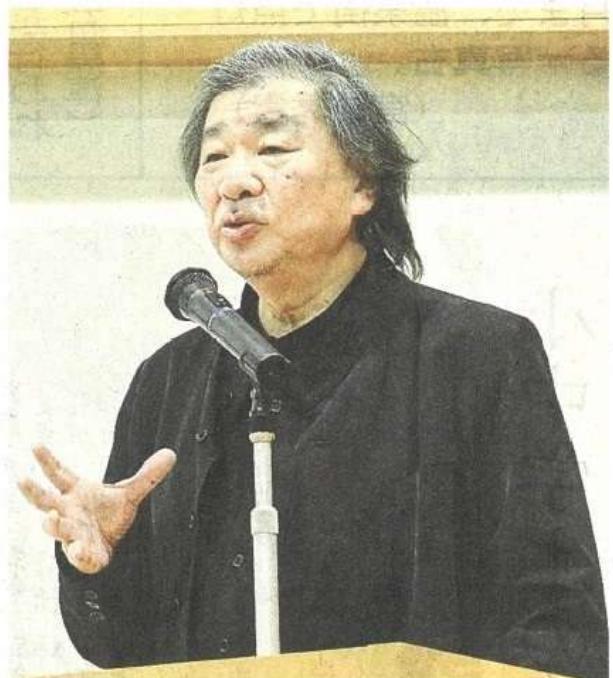
講演後には多数の参加者が質問を投げ掛けた。設計事務所に立しているのかとの学生から、立してはいるのかとの質問には、「若い時はコストを考えすぎず好きなモノを設計することが大事だ」とエールを送った。

【上毛新聞 令和7年1月17日】

前 橋

## 建築家の坂さんが 避難者支援紹介

群馬建設会館で講演



し、自身の作品や災害被災地で取り組む仮設住宅建設などの活動を紹介した<sup>II</sup>写真。

坂さんは能登半島地震やロシアによるウクライナ侵攻で避難者らの支援に取り組んでいる。「世界中で皆さんに愛される建築を造りたいと思って活動を続けている」と強調し、仮設住宅は現地で資材を調達したり、恒久的に利用できる工夫を凝らしたりしていることを説明した。

県建設業協会（青柳剛会長）が主催し、約300人が参加した。

坂さんは2014年に建築界のノーベル賞と呼ばれるプリツカー賞を受賞。昨年、下瀬美術館（広島県）が世界的な建築賞「ベルサイユ賞」の「世界で最も美しい美術館」に選ばれた。  
（真尾敦）